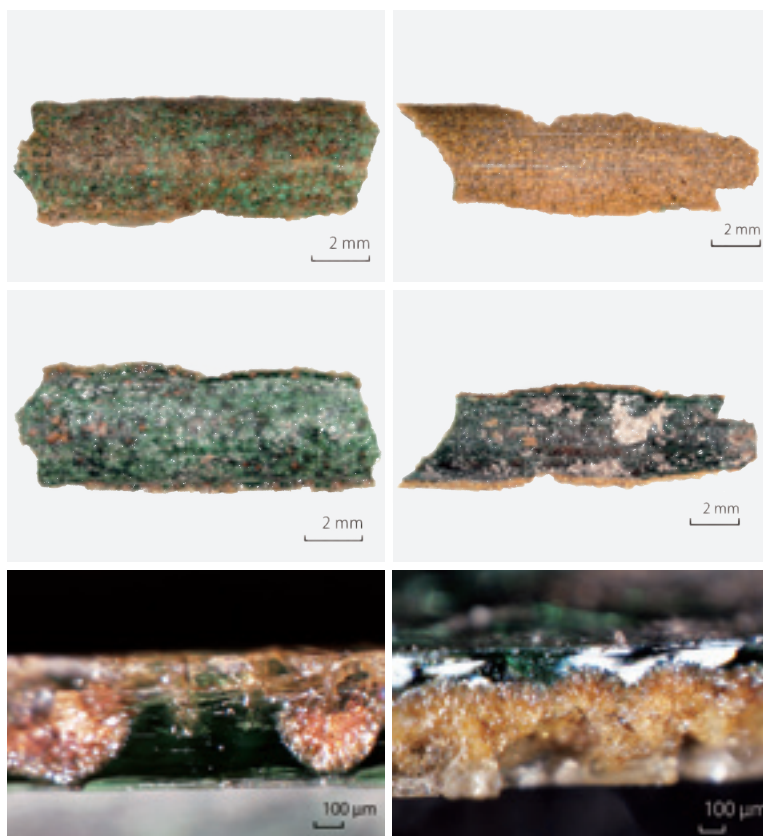




#### 旧中村家住宅建造物調査

塩尻市奈良井宿にある旧中村家住宅は、奈良井宿の町並保存運動の契機となった建物で、塗櫓製造や臨時的な旅籠の生業の痕跡を今に残す、近世宿場町の小規模建物の典型例である。

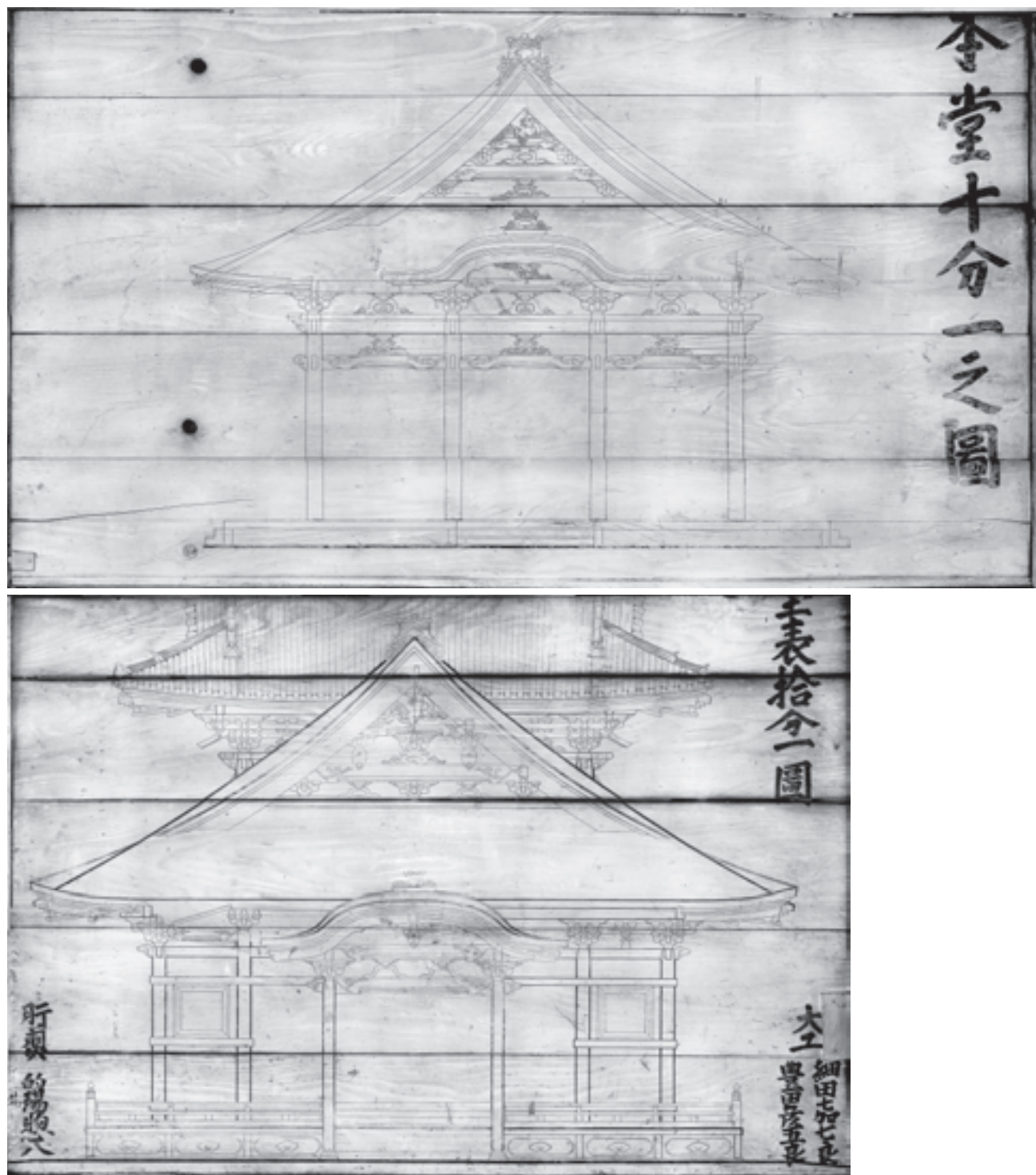
本文34-35頁参照（撮影：杉本和樹）



#### 京都府馬場南遺跡から 出土した管状ガラス製品

器壁が極めて薄く、宙吹き法で製作された可能性が指摘されている。これらは、本研究で鉛同位体比分析に供した資料の顕微鏡写真。上：外面、中：内面、下：断面拡大写真。緑色透明が本来の色調であり、風化により黄褐色不透明化している。

本文58頁参照（撮影：田村朋美）



#### 岡寺本堂脇内陣板図の調査

東脇内陣板図（上）：現本堂の建地割図。垂木の割付寸法などが記される。本堂の基本設計案として描かれたとみられる。

西脇内陣板図（下）：本堂棟札に現れる大工名が記される。長谷寺本堂をモデルとして描かれた、岡寺本堂の当初設計案とみられる。

いずれも、東西脇内陣の背面壁としておさめられていた。赤外線分割撮影のオルソ画像。

本文38-39頁参照（撮影：栗山雅夫）



# 藤原宮大極殿院の調査

(飛鳥藤原第195次)

調査地は大極殿院東北隅にあたる。東面北回廊および北面東回廊の礎石据付痕跡を15基確認した。また、回廊基壇に沿って掘られた造営溝を検出した。北東から。

本文62頁参照 (撮影：栗山雅夫)



東面北回廊の基壇土

東面北回廊の基壇は、橙褐色粘質土を版築状に積み上げており、一層の厚さは約3～10cmある。北西から。 (撮影：栗山雅夫)



回廊礎石据付穴の根石

底部には直径15cm程度の根石を密に詰める。据付穴は1辺1.2～1.5mの方形で、深さは15cm程度。東から。 (撮影：栗山雅夫)





# 藤原宮大極殿院の調査

(飛鳥藤原第198次)

調査地は藤原宮大極殿院北面回廊中央とその内庭部にあたる。北面回廊の礎石据付痕跡を24ヵ所検出し、北門の存在を確認した。基壇裾の造営溝を複数検出するとともに、内庭部では上・下2面にわたって施された礫敷を確認し、造営過程の詳細が判明した。南西から。

本文62頁参照 (撮影：栗山雅夫)



## 運河SD1901Aの埋立部で検出した下層礫敷

金雲母を含む黄橙色の砂質土を置土とする点が大極殿院南部の礫敷と共通する。南から。

(撮影：栗山雅夫)



## 基壇土を掘り込んで設置された瓦詰暗渠

直上には回廊礎石が据え付けられる。造営中に内庭に溜まった雨水を基壇外へ排出する。北東から。

(撮影：栗山雅夫)





#### 平城東院地区の調査 (平城第595次)

調査区全景。奥は第593次調査区。調査地は平城宮東院地区の北辺に位置する。奈良時代後半の掘立柱建物3棟を検出したほか、西方の井戸SE20000と調査区をつなぐ階段SX20119、方形区画遺構群、複数の被熱痕跡などの特殊な遺構を確認した。南東から。

本文128頁参照 (撮影：中村一郎)



奈良時代後半（東院B期）の方形区画遺構SX20100～20107検出状況。四周を素掘り溝で囲い、東西に8基並ぶと考えられる。溝の内側には、堀込地業状に突き固めた方形遺構や安山岩を据えた小穴などの諸遺構を伴う。北東から。

(撮影：飯田ゆりあ)



奈良時代後半（東院C期）の階段SX20119検出状況。西隣の第593次調査区で検出した井戸SE20000の東、本調査区西北辺で検出した。部分的に見切り石や敷石が遺存していた。井戸SE20000と東方の空間をつなぐ機能を有していた可能性がある。北から。

(撮影：飯田ゆりあ)





東大寺東塔院跡の調査  
(平成第600次)

廻廊北東隅部（8区）。再建北面回廊（左）と同東面廻廊（右）の基壇の高まりがみえ、手前の内庭部とは約1 mの比高がある。北面回廊の基壇上には創建期の埴敷列がみえる。南西から。

本文184-189頁参照  
(撮影：中村一郎)



廻廊北西隅部（9区）。再建廻廊北西隅の安山岩製礎石が3石遺存する。礎石建物の外側には北雨落溝と西雨落溝がめぐる。北西から。

(撮影：飯田ゆりあ)



廻廊南西隅部（10区）。再建南面回廊と同西面廻廊との取り付き部分。南面廻廊が複廊であるのに対して、西面廻廊は単廊となる。基壇を斜行する溝は近代以降の暗渠。南西から。

(撮影：中村一郎)





平城宮東区朝堂院地区の調査  
(平城第602次)

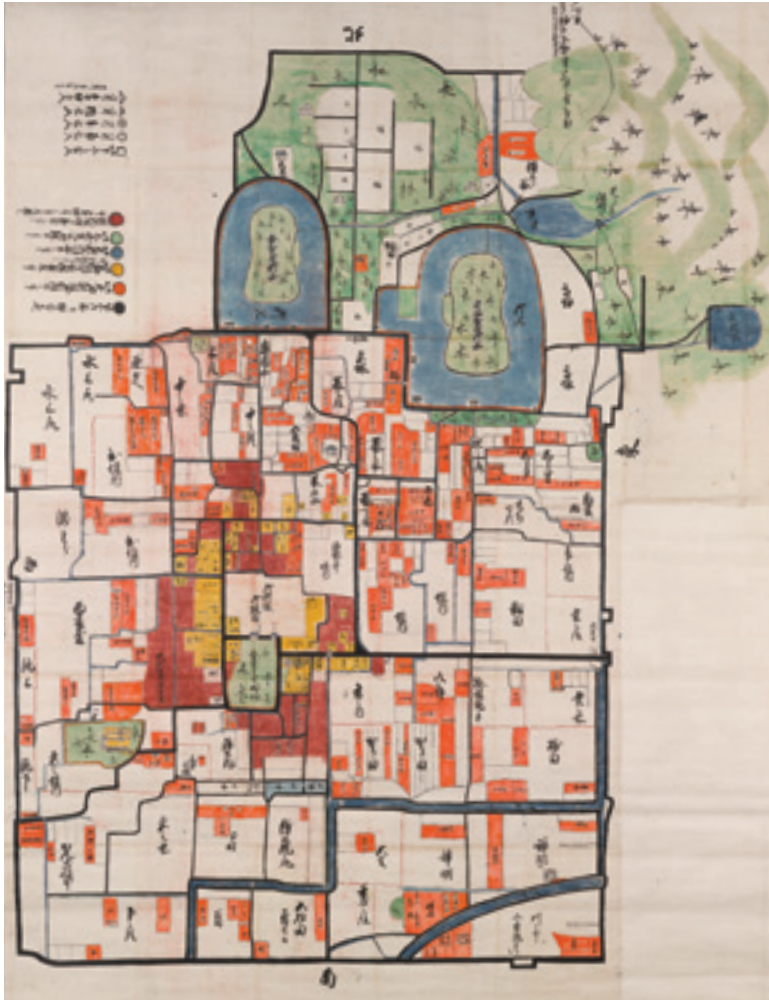
調査区全景。東区朝堂院の東門付近を調査対象とし、奈良時代前半から後半にかけての東門とその南北に連なる区画堀、雨落溝などを検出した。また奈良時代後半の東門や区画堀は奈良時代前半の基壇を踏襲していることを確認し、東区朝堂院全体の東西規模や建物の配置計画などがあきらかとなった。写真は奈良時代後半の検出面。南東から。本文146頁参照（撮影：中村一郎）

(下右) 奈良時代前半の区画堀である掘立柱塀SA11320。既調査区から想定される位置に、約3.0m（10尺）等間で掘立柱塀の柱穴を検出した。北から。（撮影：飯田ゆりあ）

(下左) 奈良時代後半の雨落溝SD13661。手前は平城第203次調査の検出面。区画堀の雨落溝と一連で、東門をめぐるようにクランクする。溝肩に拳大の石列を検出した。南西から。（撮影：飯田ゆりあ）





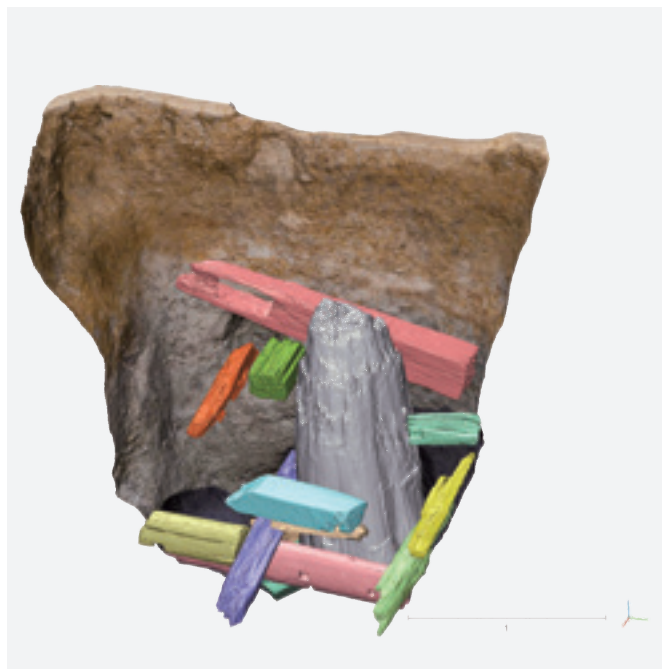


平城京左京二条二坊十五坪の調査  
(平城第601次)

(左) 江戸時代の法華寺村絵図。集落の周囲に田園が広がる。調査地は集落の東南東の端で、その南側に絵図では青い「大堀」を描く。SD11270との関連が注意される。

(右上) 調査区出土三彩瓦。左京二条二坊十五坪は平城京内でも三彩瓦が多く出土する坪である。第601次調査区でも計29点の施釉瓦が出土した。

(右下) 調査区出土箱形土製品。奈良時代前半頃の廃棄土坑SK11240から多量に出土した。蓋とセットで使用されたとみられ、二次被熱が著しい。 本文190頁参照



西大寺旧境内の調査 (平城第597次)

(左) 西大寺旧境内で検出した掘立柱。掘方からは大型の柱が出土した。建築部材等を転用して柱を固定している。北東から。

(右) SfM-MVS (Structure from Motion and Multi-View Stereo) 技術による三次元計測の解析結果。遺構のデータに個別部材の三次元計測データを加えることによって、立体的な位置関係が復元できた。

本文170頁参照